

【修士論文要旨】

社会福祉学理論の形成と展開について

— 岡村理論の理解をめざして —

田 中 康 子

論文の目的

本論文は、「社会福祉学の理論を学び研究するには、岡村社会福祉学理論とその構築の過程を理解することが重要」を明らかにすることを目的としている。目的を達成するための手法は、（１）わが国における社会福祉理論の形成と継承の歩みを概観し整理する。（２）先行研究を継承する岡村氏の研究と教育、それもこれまでに緒家の理論研究の際にほとんど採用されることがなかった、岡村氏の戦前及び『社会福祉学（総論）』刊行までに考察範囲を限定し攻究を試みる方法を採用した。論文のテーマを岡村理論に限定した理由のひとつには、古川孝順氏の分析、「独自の見解を提起し、その後の社会福祉研究に重要な影響力を及ぼしてきたのは、岡村重夫の社会福祉固有論である」「岡村の固有論は、60年代以降、先行する技術論の系譜を吸収しつつ、その支持基盤を広げ、こんにちにおいても重要な影響力の源泉であり続けている」⁽¹⁾がある。

論文の構成

はじめに

第1章 社会福祉の理論研究の萌芽と継承

第1節 わが国における社会福祉の理論化の萌芽

第2節 社会福祉の理論化の進展と形成

第3節 社会福祉の理論化の停止と継承

第2章 岡村重夫の戦前の研究と社会福祉学研究のはじめ

第1節 戦前の研究

第2節 終戦直後の実証的調査研究

第3節 社会福祉の学的研究

第3章 岡村重夫の社会福祉学構築への歩み

第1節 岡村と社会福祉本質論争

第2節 社会福祉本質論争の価値

第3節 社会福祉本質論争と岡村理論

第4章 岡村社会福祉学の理論化と構築

第1節 岡村社会福祉学の理論化

第2節 岡村社会福祉学理論と『社会福祉学（総論）』

第3節 『社会福祉学（総論）』への評価

おわりに

参考文献

論文の要旨

第1章では、吉田久一氏の「単なる『社会福祉論』は『社会福祉理論』とはいえない。また社会福祉の理論的研究は、その系譜である慈善事業論、救済事業論を含めても僅か100年のことにすぎない。その中で理論として歴史的位を有するものは、留岡幸助『慈善問題』、井上友一『救済制度要義』、小河滋次郎『社会問題救恤十訓』、生江孝之『社会事業綱要』、海野幸徳『社会事業学原理』、大河内一男「我国に於ける社会事業の現在及び将来」、孝橋正一『社会事業の基本問題』、岡村重夫『社会福祉学（総論）』等にすぎない。この中で留岡・井上・小河の所論は、社会福祉理論にとって系譜的存在というべき²⁾の教えに導かれ、留岡氏・井上氏・小河氏の研究成果を土井洋一氏、右田紀久恵氏、遠藤興一氏の分析を含め整理した。第2節では、留岡氏らの慈善・救済理論が継承される大正・昭和初期を考察範囲として小河氏、海野氏の研究を概観した。磯村英一氏の海野氏の概念規定に対する厳しい批判、中垣昌美氏による海野氏の概念の特徴を分析する論文も援用した。第3節では、海野氏と磯村氏らの社会事業の概念についての論争が「昭和初期社会事業本質論争」へと継承されて行くことを辿りながら、大河内一男氏、服部英太郎氏、風早八十二氏らの業績を一顧した。さらに吉田氏の「敗戦から昭和三〇年代初頭にいたる戦後社会事業理論は、戦前の全般的危機以降の社会事業理論と一面連続し、一面新たに占領軍当局によって指導された社会事業『近代化』理論を加えながら、高度成長以降の社会福祉事業理論へと連続する」³⁾の「連続を担った研究者のひとりとして岡村氏を位置づけ」、それを論拠として戦前における岡村氏の研究を学び理解することが「岡村理論」を理解するための不可欠な学びであることを論述した。

第2章では、岡村氏の戦前の研究成果である論文と著書を概観し整理した。「独逸労働戦線の職業教育に関する新方針」⁴⁾には教員の質や継続教育が将来の熟練工の育成にとって意義があると論じられていること。「労働資源の國防的統制」には、「一元的、計画的なる労働資源の全国的調査を豫想することなくしては、不可能」⁵⁾として調査の重要性を提唱する論述があったことを特記した。『戦争社会学研究』⁶⁾については、和辻哲郎氏の諸研究を援用して理論が展開され、著書への評価はすでに秋元律郎氏と松本英孝氏によって付与されていることを加えた。第2節では、岡村氏の戦前戦後における一貫する研究の視点を例証する方法として、終戦直後の実証的調査研究である「終戦直後の市民生活」⁷⁾の論文を分析した。また、大橋薫氏や右田紀久恵氏らの証言をもとに岡村氏の一貫する調査研究の姿勢を明らかにした。岡村と多くの人々との出会いは、「社会福祉主事資格認定講習」「社会事業研修所の事業」を通してまとめた。「社会福祉主事資格認定講習会講義科目並びに講師の名簿」「SCAPライブラリーとのかかわり」では、岡村氏の研究分野の進展とソーシャルワーク研究への視点の拡大を推察した。岡村氏の日本社会福祉学会創設時のエピソードからは、学会の一員として忘れてはならない事実の存在を学んだ。

第3章では、岡村氏の世界福祉学構築への歩みを理解し学ぶために岡村氏の論文発表に始ま

る「社会福祉本質論争」に注目した。論争に参加した田村米三郎氏らすべての研究者の論文を永岡正己氏や真田是氏らの分析を援用しながら整理した。それを受けた第2節では松田真一氏の「論争としてはさゝ程実りあるものを残さなかった」⁽⁸⁾を受け入れつつも吉田氏の「本質論争」への意義と評価。岡本民夫氏の「社会事業におけるケースワークなどの方法論的体系をめぐる論争がはじまる」⁽⁹⁾の分析を重要視し、戦後日本の社会福祉の理論研究とソーシャルワークの理論と実践の研究に貢献した岡村氏の功績を宮田和明氏、松田氏らの研究を受けながらまとめた。第3節では、論争後の「岡村理論の独自性」を整理した。岡村理論を理解する際に重要な「社会と個人」の関係には特に注目した。そして、岡村氏にはじまる本質論争が「生活保護制度とサービス論争」「仲村・岸論争」などと称される学術論争へと引き継がれていくことをまとめながら岡村理論がしだいにその全体像を明確にして行く継続性を追究した。

第4章では、「本質論争」において社会福祉及びソーシャルワークの理論研究と実践に影響を与えた岡村氏の社会福祉「学」攻究を鮮明にした。第2節では、『社会福祉学（総論）』をとり上げ、「序言」に記述される岡村社会福祉学と家政学との関連に注目した。関連理由を松本氏の著書によって補足した。第3節では、『社会福祉学（総論）』に対する評価を整理した。最初に出版1カ月後に出版された磯村氏の書評を紹介し、継続する岡村氏の理論の深化と展開に対しては、木田徹郎氏、孝橋正一氏、佐武弘章氏、松井二郎氏、杉本一義氏らによる批判と賞賛を採用した。さらに、岡村理論とソーシャルワーク理論との関連については、前田敏雄氏、出村和子氏、野坂勉氏の貴重な研究業績を援用させていただいた。

今後の研究課題

本論文は、「岡村理論を理解するために」との副題の意図を達成する方法として、今まで、ほとんど取り上げられることのなかった岡村氏の戦前の研究業績にも注目した。この考察で明らかにできたことは、「戦後に先学が樹立、体系化した社会福祉学理論を学び研究するためには、戦前の岡村氏の研究と継続する研究姿勢の一貫性を学ぶことが不可欠」ということである。それゆえ私に与えられた今後の研究の課題は、岡村氏の戦前からの論文、著書をさらに深く読み理解すること。また、1980年以後の岡村氏の講演等に岡村理論をより深く研究するための貴重なキーワードが残されており、その整理も重要な課題と考えている。

最後に岡村理論の理解を試みた私に対して岡村氏は、「戦争の歴史を忘れてはならない。その事実を学びそれを語り伝えることも社会福祉学を研究する者の使命である」を教示されているように思えてならない。¹⁰⁾

参考文献

- (1) 古川孝順 (1955) 「日本社会福祉学の展望と課題」 (一番ヶ瀬康子編『21世紀社会福祉学』1-26.)
- (2) 吉田久一 (1995) 『日本社会福祉理論史』3.
- (3) 吉田久一 (1974) 『社会事業理論の歴史』302.
- (4) 岡村重夫 (1937) 「独逸労働戦線の職業教育に関する新方針」『職業紹介 第四卷十二號』68.
- (5) 岡村重夫 (1937) 「労働資源の國防的統制」『社会政策時報 第200号』182.

- (6) 岡村重夫 (1943) 『戦争社会学研究』
- (7) 岡村重夫 (1964) 「終戦直後の市民生活」『大阪市史紀要 第11号』
- (8) 松田真一 (1973) 「社会福祉本質論争」真田是編『戦後日本社会福祉本質論争』 3.
- (9) 岡本民夫 (1973) 『ケースワーク研究』 109.
- (10) 田中康子 (2003) 『社会福祉学の理論』 152.